

【調査報告】

## 沖縄県座間味島の年中行事 ハマウリ

山本 恭子

はじめに

座間味島は沖縄本島的那覇市から西に約35kmの海上、慶良間諸島に属する。泊港から片道約2時間のフェリーが1日1往復、片道約1時間の高速船が夏期は3往復、冬期は2往復就航している。2017年1月1日現在の世帯数は351世帯、人口は609名であり、島民は座間味、阿真、阿佐の3つの集落に居住している。なかでも座間味港をもつ座間味地区に小中学校、村役場、郵便局、診療所、漁協、駐在所、スーパーがあり、多くの人々が暮らしている。島の産業は民宿、マリンスポーツ、ホエールウォッチングなどの観光業が中心で、漁業も行われている。その他、自給自足の畑がある。また、座間味島を含む慶良間諸島一帯は2014年3月5日に慶良間諸島国立公園に指定された。

本報告の調査対象である、ハマウリは旧暦の3月3日に行われる行事である。「浜下り」、「サングワチサンニチ」、「サングワチャー」とも言われ、沖縄各地に伝わる伝統行事である。一般的には、各家庭で重箱にご馳走を詰め、ヒヌカン（火の神）<sup>1)</sup>や仏壇に供えた後、女性たちが海辺で身を清め、健康祈願などを行い、潮干狩りで楽しく過ごし重箱のご馳走をいただくとなっている。ハマウリは沖縄の各地で行われているが、地域ごとに違いがあり特徴がみられる。久万田（1993）は、阿嘉島のハマウリについて1988年から1991年の調査を行っており、阿嘉集落においては旧暦3月3日午前中にシーミー（清明）<sup>2)</sup>の墓参を行い、夕方から4日にかけて女性達が浜に出て楽しみ、集落を東西に分ける境界上で歌や踊りを競い合い、集落中を踊り巡る行事であり、神人（カミンチュ）も参加していたと報告している。また、長谷川（2004）は、渡嘉敷島のハマウリについて2004年の調査を行っており、旧暦3月3日の朝、阿波連漁港に近い拝所にノロの代わりと呼ばれる神人やオガミンチュ（拝む人）と呼ばれる島の女性が10名ほど集まり、拝みが行われる。その後、ハナリ島に小舟で渡って拝みを行う。舟に乗って海を渡りながら、にぎやかに歌を歌うナガレブニ（流れ舟）というアシビを行う。また、3月4日には渡嘉敷港でハーリーが行われたと報告している。

座間味島では、3月3日の午前中にいわゆるシーミーにあたる墓参を行い、午後に干潮に合わせて潮干狩りを行い、身を清め、夕方にはナガレブニが行われている。島民はこれらの一連の行事を合わせてハマウリと認識している。本稿では2014年、2016年、2019年に筆者が座間味島のハマウリに参加して記録した事柄や島民からの聞き取り調査をもとにまとめた。

## 1. ウジュウ（お重）づくり（2014年の記録より）

ウジュウづくりには普段とは異なった食材が必要となるが、那覇の市場まで出かけるのは、時間も船賃もかかる。島で唯一のスーパーではハマウリの1週間前、「旧3月3日、予約受付中」との看板を出し、食材などの予約販売をしていた。

M家でのウジュウづくりを紹介する。M家では1925年生まれ、88才になるF氏がハマウリのウジュウを作っている。ゴボウ、三枚肉、結びコンブは前日からゆでて下ごしらえしておく。当日は朝7時頃から料理が始まった。グルクン<sup>3)</sup>の素揚げ、マグロの天ぶら、厚揚げを油で揚げた。昨日下ごしらえしたゴボウ、三枚肉、結びコンブ、こんにゃくを、醤油、さとう、泡盛を合わせただし汁で煮た。その他、赤いかまぼこ、カステラかまぼこ、サングワチグワシ<sup>4)</sup>、ツユクサ<sup>5)</sup>、色鮮やかな香菓子が準備されていた。スーパーに注文して取り寄せたものである。そして、2014年には、F氏の長男が料理のできあがりを待って重箱に詰めた。一つの重箱に詰める料理は9種類、それぞれの料理は横向きに揃えて個数は奇数とする、高さを合わせるという決まりがあった。準備された料理の種類は12種類あったが、3つの重箱に9種類ずつ選んで彩りよく詰められた（写真1）。9種類の料理が詰まった重箱以外に、甘い味の白い餅だけを詰めた重箱、ピンク色のかんだけ詰めた重箱も作られ、これらもすべて奇数個詰められた。偶数は割れされる数字なので、良くないとされている。できあがったウジュウはまず、仏壇に供えられ、その後、お墓に持って行くために風呂敷に包まれた。上記のウジュウづくりの記録は2014年のものであるが、2019年も93才になったF氏が、変わることなくウジュウを作った。



写真1 ハマウリのウジュウ（お重）

## 2. 墓参り（2019年の記録より）

座間味島には港の東西の海岸線に合わせて60ほどのお墓、その殆どが港の東側にあり、古いものは斜面に横穴を掘り、墓室を作り入り口をふさいだ掘込墓や亀甲墓（きっこうばか）<sup>6)</sup>、新しいものは家の形をした破風墓（はふうばか）<sup>7)</sup>が殆どである。午前8時ごろから正午にかけて各家で墓参りが行われた。お墓は集落のすぐそばにあり、港から200メートル程度の距離にあるが、海岸線には墓参りに来る人たちの車が列をなして停まっていた（写真2）。

M家でも親族4代揃って、10時から墓参りが始まった。まず、M家の墓（写真3）、本家の墓、



写真2 海岸線にならぶ墓と墓参の車の列



写真3 墓前に供えられたウジュウ（お重）

門中墓（写真4）、F氏の長男の自宅の敷地内にある土地の神様に全員揃ってお参りして、その後、F氏に息子が付き添ってF氏の姉の墓にお参りして、終わったのが11時半であった。最初にM家の墓ではウジュウを供え、線香を立てられた。線香は1枚が6本となるヒラウコウ<sup>8)</sup>が使われ、神様に2枚と半分（これのことを12本3本と表現されていた）、それに加えて半分に割ったものを参拝者の数だけ供えられた。そして、親族揃



写真4 墓前での拝み

って手を合わせ、しばらくしてから、ウジュウの料理を一つ裏返して、新しいものに交換した。ウジュウの料理を裏返すのはご先祖様がご馳走を受け取った印であり、次のお墓に持っていくために新しい物と交換される。ご先祖様があの世でお金に困らないように墓の敷地の隅でウチカビ<sup>9)</sup>を燃やして墓参りが終わった。このウチカビはしっかりと燃やすことが大事だと言われており、完全に燃えたところで泡盛をかけた。

お供えしたウジュウなどを再び風呂敷に包み、次に本家の墓、門中墓、自宅の土地の神様、F氏の姉の墓の順に同じように墓参りが行われた。このように、各家庭がいくつもの墓に墓参するので、本家の墓、門中墓などでは、順番を待って行うこともあった。崖の斜面に作られた古い大きな墓では入れ替わり立ち替わり人がお参りに来ていた。座間味島では沖縄本島のシーミーで行われるような墓前で食事をするのではなく、家族揃って拝み、しばらくの時を過ごし、お供えしたウジュウは持ち帰る慣わしである。

### 3. 潮干狩り（2016年、2019年の記録より）

ハマウリの日は、潮に入ることで、身を清め健康祈願や家族の安全平和を願うことが出来るこ

ともあり、座間味島でも干潮時刻に合わせて午後から潮干狩りに出かける人が多い。それぞれ思い思いのところで潮干狩りを行う。船を出して、座間味港の前にある安慶名敷島や嘉比島などに行って潮干狩りを楽しむ人もあれば、港のすぐそばのリーフで潮干狩りを行う人もある。

2016年、筆者はY氏の舟「セティウス」で座間味港の前にある嘉比島の潮干狩りに同行した。Y氏の親族や、従業員などゆかりの人々が、子どもたちから大人まで、総勢15名ほどで、潮が引いたリーフで14時頃から16時前までサザエ取りを楽しんだ。このようなかたちで、子どもたちまで島の行事が受け継がれている。また、潮干狩りを行っているのは多くは女性であるが、男性の参加もみられた。

2019年はF氏に同行して、座間味港の西に位置するウルヌサチの海岸へ潮干狩りに出かけた。座間味集落の自宅から、約500メートルの道のりを手押し車に道具を載せて、ビーチまで歩いた。とても93才とは思えない足取りである。膝下まで潮に浸かってタコなどの獲物を探したが、見つからず。岩場に張り付いているトコブシを見つけ、獲物を見つけたF氏は上機嫌で大きなものから剥がして持ち帰った。ハマウリの日に潮に浸かることはF氏にとっては昔からの楽しみが蘇る時でもある(写真5)。



写真5 ウルヌサチにて潮干狩り

#### 4. ナガレブニ (流れ舟) (2014年、2019年の記録より)

「ナガレブニ (流れ舟)」を行うことが沖縄で一般的に行われているハマウリとは異なる座間味島のハマウリの特徴である。ナガレブニは元来サバニと言われる沖縄の伝統的な小さくくり抜き舟で行われていたことから、「船」ではなく「舟」という文字が適切であるといわれる。座間味島はダイビングショップや漁業を営む人も多いので、人口の割には舟が多い。航海安全や大漁を願っての行事である。舟主はもとより、舟を持たない人も知り合いに乗せてもらい、舟には子どもたちも含めて多くの島民が乗っており、ウジュウが持ち込まれたり、万国旗の飾り付けをした舟や(写真6)、さんしんや太鼓をたたいて楽しんでいる舟もある。座間味港の前には安慶名敷島と嘉比島という無人島があり、座間味港と安慶名敷島と



写真6 ナガレブニ 万国旗を飾り付け出港する舟

嘉比島で囲まれた海域で舟が輪になって回るパレードが行われる。舟の円陣の先頭には三隻の船に分かれて神職者であるノロの一行が乗舟しており、航海安全や大漁祈願、五穀豊穡の祈願がされている。

2014年はF氏の息子であるY氏の舟「セティウス」に乗ってナガレブニに参加した。16時40分頃、舟は座間味港を出港した。舟には親族と従業員が乗っていて、唐船ドレイ<sup>10</sup>の曲がかかり、太鼓もあり、にぎやかである。午前中にお墓に持って行ったウジュウもあり、ビールもある。88才になるF氏も若い人にエスコートされて主役として乗船し、ひょっとこのお面をかぶって、太鼓をうち鳴らして健康祈願や家内安全を祈願した（写真7）。カチャーシーを踊る人もいた。座間味港から出港した全ての舟が輪になって2周パレードしたところで、舟が横並びになって概ね4隻ずつ横ロープで繋がれた。スピードを合わせて舵を取るのには普段からのチームワークの良さが垣間見られた。舟が繋がれると子どもたちが喜んで別の舟に飛び乗り、ウジュウのご馳走を食べて行った。帰港したのは17時半であった。



写真7 ナガレブニ 太鼓をうち鳴らし余興を楽しむ

2019年はY氏の舟「エスコート」でナガレブニに参加した。舟には当家の家族が乗船している。16時に嘉比島前に集合との連絡が各舟に届き、座間味港から続々と舟が出航した（写真8）。座間味港を出港した舟は、嘉比島前に集合し28隻の舟が大きな円陣を作って2周回った。パレードの先頭は神人たちを載せた三隻の舟である。終盤には海上では先頭の3隻の舟、その他の舟は4隻ごとに舟の側面をロープで繋ぎ合わせて航行した（写真9）。すると、子どもたちが一斉に隣の舟に乗り移り、楽しんだ。最後尾は座間味で最も大きな漁船の1隻であった。港に帰ったのは17時40分であった。



写真8 ナガレブニ 座間味港から出港



写真9 ナガレブニ 舟が繋がれたようす

## 5. ハマウリで行われている神行事

座間味島のハマウリは午前中のシーミーから始まり、島民の殆どが何らかの形で関わり、盛大に行われているが、その一方で同時に神人やオガミンチュ（神人ではないが、拝みを行う人の意味）による神行事も執り行われている。

沖縄本島では時代の流れと共に年中行事は薄れつつあるが、座間味島では高齢化により、祀りを支える人が減少してきていると言われるものの、熱心に伝承されている。神行事にはノロの代わりと言われる神人の他に座間味、阿真、阿佐の各集落の区長やオガミンチュが参加して行われている。座間味集落には大きなお宮として、集落の中心部にノロ宮、港の近くに特に海上安全を祈願したイビヌメ（海神宮）がある。座間味区長の妻として年中行事を行っていた S 氏によると、年中行事はハチウクシーから始まり、ウマチー、ハマウリ、アブシバレー、井戸の拝み、海神祭、御嶽登りなどが行われ 12 月 24 日のトゥシジリで結びとなる（表 1）。現在、座間味島にはノロはおらず、座間味に家を持ち、沖縄本島に暮らしている M 氏が行事毎に座間味に帰省し、ノロの役割をしている。

かつて、ハマウリの日のナガレブニは、座間味島の古座間味ビーチにある座間味シルと言われる拝所からノロ、安慶名敷島からンジュイチと言われる神人、嘉比島からシーミチと言われる神人を載せた三隻の舟のみで行われており、舟の中ではチジンやさんしんを鳴らしてガーエー<sup>11)</sup>を行いながら入港していた。鰹漁が盛んになり、島が裕福になった大正時代から現在のように他の舟も加わってのパレードが行われるようになったと言われている。

現在、ハマウリに日にはノロ宮、テンソンシ宮、ウフウナガ宮と言われる 3 つの宮に海上安全

表 1 座間味島の年中行事

日程（旧暦）	祭祀名	概要
1 月 2 日	ハチウクシー	新しい年の始まりをノロ宮に集まって拝む。
1 月 16 日	ジュウルクニチ	あの世のお正月。お墓参りを行う。
2 月 15 日	2 月ウマチー	内の殿（ノロ宮の後ろ）に集まって拝む。
3 月 3 日	ハマウリ	海上安全、五穀豊穡を拝む。
4 月 14 日	アブシバレー	害虫を海に流す儀式。島民が畑から虫をとり、総合センター前に持ち寄り、まとめて海に流す。
5 月 15 日	5 月ウマチー	外の殿（ノロ宮の前）に集まって拝む。
6 月 15 日	6 月ウマチー	外の殿に集まって拝む。
6 月 25 日	井戸の拝み	各井戸を回って拝む。
8 月 10 日	8 月ウマチー	外の殿に集まって拝む。
8 月	海神祭	イビヌメー（海神の宮）で拝む。 事前に追い込み漁が行われ、魚が供えられる。
9 月	御嶽登り	山にある 4 カ所の嶽で拝む。 アカサチ、ウフタキ、ナカタキ、フタキの 4 カ所の嶽があり、それぞれの家によって所属する嶽が決まっている。
12 月 24 日	トゥシジリ	ノロ宮で神様に 1 年間の報告をする。



写真 10 嘉比島での拝み



写真 11 イビヌメ 流れ舟終了の拝み

または五穀豊穰と、赤、黄、青、白、紫の五色の旗を立てられる。ノロ宮はノロが司っていた宮、テンソンシ宮はンジュイチが司っていた宮、ウフウナガ宮はシーミチが司っていた宮であるが現在は3名とも不在である。正午前後に、ノロ宮のからはノロの役割をしている神人であるM氏がS氏の「第三安清丸」に乗って古座間味ビーチにある座間味シルに行き拝みを行う。また、テンソンシ宮の旗はY氏の舟「けらまⅢ」で安慶名敷島へ、ウフウナガ宮の旗はオガミンチュであるS氏の乗る「第五えびす丸」で嘉比島に運ばれ、座間味シル、安慶名敷島、嘉比島の3カ所で15時半ごろまで拝みや潮干狩りが行われる（写真10）。そして、座間味シル、安慶名敷島、嘉比島から神人やオガミンチュを乗せた舟がそれぞれ出港し、16時頃、3カ所の中央の海上で出会った。そして座間味港から出港した一般の舟が後ろに続いて座間味港、安慶名敷島、嘉比島の間の海域で円陣を描いてのパレードとなり、海上安全、五穀豊穰が拝まれる。ナガレブニの終わりには中央にノロの舟、右にンジュイチの舟、左にシーミチの舟が繋がれ、座間味港に帰った。ナガレブニ終了後、イビヌメにて拝みが行われた（写真11）。

## 6. あとがき

沖縄の多くの年中行事が新暦ではなく旧暦で行われており、座間味島ではハマウリは旧暦の3月3日に行われている。旧暦で行われる行事は曜日かまわず行われるため、現代社会では不便を生じることもある。しかし旧暦は潮の満ち引きと合致するため、3月3日は大潮で干潮時には大きく潮が引き、潮干狩りに適した海となる。このように年中行事は自然との関わりのおかげで営まれるため、今も旧暦で行われている所以である。

座間味のハマウリにおける男女の役割に注目して考察すると、墓参は女性である「おばあ」の指示で行事が運んだ。そして、女性は潮干狩りで禊ぎを行った。そして、海上安全や五穀豊穣などの祈願を行うのも女性である神人やオガミンチュであった。しかし、神人やオガミンチュを乗せる舟やナガレブニの舟を出すのは男性であった。潮干狩りも男性も参加して楽しんでいるが、そこに禊ぎの意味を持つのは女性であった。これらの事象を集約すると拝みを行うのは女性であ

り、海に関する事は男性の役割である。沖縄で県民から神の島と尊重され、現在も多くの神行事を行っている久高島では昔から男は海に出て、女はその無事を祈るとされており、座間味のハマウリも同じところに根ざしていることがわかった。

また、沖縄では一般的に年長者が尊重されることが多くみられるが、今回の調査でも、ウジュウ作り、墓参の全てを一家の「おばあ」である F 氏が仕切っており、「おばあ」の意見が絶対である。ナガレブニでは「おばあ」は健康や家内安全を祈って太鼓をうち鳴らし、回りの人に元気を与えてくれる。主役は「おばあ」である。このように、今回も「ハマウリ」の調査を通して、「おばあ」の偉大さを感じる事ができた。

#### 注

- 1) ヒヌカン（火の神）：台所の一角に祀られており、香炉と、白い器に水、塩、米、酒、菓物が供えられている。家族の健康や仕事の成就を祈る、最も身近な存在である。
- 2) シーミー（清明）：墓地の土地の神に先祖が心安らかに眠れていることに感謝し、先祖に線香やウチカビを供える。沖縄本島では一般的に新暦の4月5日から約2週間の間に行われる。親族が墓前に集まり、拝みを終えてから会食と歓談を行う。沖縄では正月、清明、盆が三大大行事である。
- 3) グルクン：沖縄県の県魚である。タカサゴの沖縄方言。
- 4) サングッチグーシ：小麦粉、卵、砂糖等を混ぜて油で揚げた揚げ菓子。材料はサータンダギーと似ているが、細長く伸ばした生地を長方形になるように切って、上面に包丁で3本のスジを入れてから油であげる。最近はいつでも売られているが、本来は3月3日にしか作らない菓子である。
- 5) ツユクサ：黄緑色の生地に小豆餡が包まれた、どらやきのようなお菓子
- 6) 亀甲墓（きっこうばか）：沖縄では死者を墓室の中に3年から7年安置した後に洗骨を行い骨壺に入れて再び葬送する風習があった。そのため、墓は大きな墓室を有している。亀甲墓は斜面や岩盤に穴を掘り、棺を安置する部屋を作り、入り口をふさいだ墓で、屋根の部分が亀の甲羅のような形をしている。
- 7) 破風墓（はふうばか）：家の形をした墓で、屋根が破風形（三角形）となっている。家の形をしているので、亀甲墓のように斜面などに穴を掘るのではなく、地面上に立てられている。
- 8) ヒラウコー：沖縄で用いられている線香で6本の線香が集まって長さ14cm×幅2.5cmほどある。1枚を1ヒラと言い、1ヒラを6本と数え、縦に半分に割ったものを3本と数える。
- 9) うちかび：あの世のお金を意味する。銭型の押し印を横5列縦10列に打って押しした黄土色の紙。先祖へのお供えとして燃やす。
- 10) 唐船ドーイ：お祝いの時に演奏されるさんしん楽曲。この曲にあわせてカチャーシーを踊る。カチャーシーはかき混ぜると言う意味があり、一般的に祝いの席で参加者が踊る踊りである。
- 11) ガーエー：踊り勝負のこと。お互いに競い合って踊りを行う余興。

#### 謝辞

取材に協力いただいた、宮村文子氏、宮平安弘氏、宮里芳和氏、宮里早苗氏、浜田サチ子氏、宮平正俊氏に深く感謝申し上げます。また、ナガレブニに乗せていただいた宮村幸文氏、佐野裕二氏に深く感謝申し上げます。本稿をまとめるにあたり、ご助言をいただいた浜口尚教授に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

長谷川曾乃江（2004）渡嘉敷島における2つの「浜下り」についての覚書，中央大学人文科学研究所 人文研紀要，51巻，279-294



久万田晋, 寺内直子 (1993), 座間味村阿嘉の年中行事、ハマウリ (浜下り) を中心に, 沖縄県立芸術大学  
附属研究所紀要, 35-102

#### 参考文献

高橋恵子 (2003) 「暮らしの中の御願」 ボーダーインク

比嘉淳子 (2008) 「沖縄・暮らしのしきたり読本 御願・行事編」 双葉社

宮城正勝 (2009) 「よくわかる御願ハンドブック」 ボーダーインク

宮里正太郎 (1989) 「座間味村史」 座間味村役場

---

[やまもと ゆきこ 文化人類学]